

意地でも日刊

# スペイン音楽の旅

2018. 7. 4 | vol. 7

井上 鑑 Akira Inoue

第七号  
旅の終楽章はいつも



顔の多いビルディング

# 家

家族旅行であれ、仕事の旅であれ、日常のペースとなる場所に帰ることで旅は終わる。さなかには意識していなくても高揚感のあった時間が弛緩する、充実と疲労の余韻が待ち受けている。今回の旅行は僕自身にとっては例外続きの体験だったけれども、結局は他の様々な旅と同じように、これからの自分を見つめ直そうというぼんやりした自覚と共に終わろうとしている。

何と言っても、古川展生さんの参加が今回の旅の充実度を倍加させてくれたことは疑いがない。スケジュアリーングにも大変暖かくご協力を頂いた。詳細が見えていない大分早い段階でオフアアという声をかけてしまったものの、通常の録音や演奏の旅とは違って僕自身が行程や内容を全部決める性質のものではなく、なかなか確定的なスケジュールを出せなかったのだ。にも関わらず、スケジュールを確保して下さり、駆け足の行程になったとは言え一番大事なシーンにはしっかりとその音楽と人柄を届けて下さった。この事は改めて心からの感謝を表しておきたい。

東京都交響楽団の首席チェロ奏者としてのスケジュールだけでもリハーサル、本番、室内楽のプロジェクトなどなど…大体クラシックの演奏家は1年半くらい先のスケジュールまで埋まっているのが普通なのだ。その上、夏は各地での音楽祭シーズンだし、古川さんには古武道はじめジャンルを超えた活動も多い。そのことを考えると、古川さんご自身も最初にお話しした時の言葉の通り「あ、絶対行きたいです！」という気持ちを持っていた事が痛いほどによく判るのだ。

実のところを白状すると、僕はいわゆる「ファンサービスのツアー」というものがあまり得意ではない。もちろん参加したことはないし、自分で企画するほど売れてもないし、実情を知らないのも事実なのだ。何処かへ行って演奏するのならば、そこに生活している人たちと交流出来ないという意味が薄いのでは無いか？ ついそう感じてしまう訳である。でも今までの経験の中でそうした交流をしっかりと形にすることの大変さ、難しさもいやというほど思い知らされてきた訳で、今回もどのようなことになっていくのだろうかど期待と不安がない交ぜになっていたのだ。

でも今回の印象はそうした事前の気分とは全く違う、諸手を挙げて大歓迎のものとして僕の中に残っている。つまり、「古川さんの演奏をベンドレルとバルセロナで聴く」という素晴らしい体験にスペイン旅行が着いてきた+しかもゲルニカの人々としっかりと心がつながった」をさせて頂いたのである。

ベンドレルでの演奏会もそれはそれは素晴らしいもので、そこで起きたスタンディングオベーションには井上頼豊とパブロ・カザルスへの献奏という意味合いが深く寄与していたように思える。そのこと自体出掛けて行かなくては実現出来ない貴重な時間なのだから、本当にかげがえのないことである。一方、ゲルニカの一般の方達が詰めかけて下さり、さらには地方局とは言えテレビカメラまで入って3分以上ニュース番組で取り上げられた、という事実はそこに生活している人たちとの接点が確かに生まれたことを示していると思うのだ。ゲルニカに今住んでいる人たちが現実には無差別爆撃を体験している筈も無いが、広島という街にはやはり特別の感心と共感を持っている、そのことが生んだ交流だったに違いない。広島からゲルニカへメッセージを持って歌いに来た人たちが、彼らにはその存在自体がひとつの音楽として伝わってくれたのである。

欲を言えば切りが無いが、ゲルニカのみなさんには「今度はチェロの古川さんも連れてきます。格好良いんですよ！」と言いたい。ベンドレルのみなさんにはこの旅の参加者達がゲルニカで何を感じとって来たかを、もっとはつきりと音楽として伝えたい。

こうして旅は次の旅を生み続けていくのである。